

巻頭言

全国畜産課長会議に出席して

惣津 律士

2月1日、2日の全国経済部長会議について、4日に全国畜産課長会議が農林省の大会議室で開かれた。渡部局長、初の会議であり、局長が陣頭に立って極めて率直な態度で終始応答された事は印象的であった。

31年度予算では特に画期的な面は見られなかったが、集約酪農の振興が今後も引続いて強力に実施される事となり、その遂行上必要な牧野改良、融資等の方途は勿論講ぜられるが、就中ジャージー牛の導入は今後は世界銀行の借かんに依る方法に変革される事となった。本県では1958年からこの様式が取られる事になって居り、政府計画としては本県のジャージー種牛の頭数を1962年に5,400余頭に増殖する事を期待している。

次に畜産物の消費流通施策に対する予算は30年度から取り上げられているが、これは国民全般の協力を得なければ目的を達成し得ない所に問題があり、御承知の通り遅々たる歩みを辿っているが、31年度も引続いて、技術体制強化の予算とならんで、盛られている事はうれしい事であるが、もっと積極的な予算が組まれて而るべきではなかったかと痛感された。肉と乳の解決が農林省施策の中枢にまで成長して戴きたいものである。

技術体制強化を目ざした畜産会の発達に誠

に結ぶ構であるが、その根本となる畜産に関する試験研究機関の整備拡充は衛生防疫面を除いてはあまりに貧弱である。日に月に科学が躍進する昨今に於いて、畜産技術の進歩が取りのこされる事は我々畜産人にとってたまらない事である。私は会議に出席して、畜産局が技術水準の向上を求めながらも、その基本たる試験研究機関への努力が表面化していなかったのに、焦慮とさみしさを禁じ得なかったものである。

併し乍ら畜産局が全力を傾倒して、時代の要請に応えられつつある事を会議をかさねるにつれて私共はひしひしと感じる事は事実であり、感謝に堪えないものがある。さあれ、地方の中に目をそそぐ時に、畜産界にはあまりに封建性が存在する事を感じるのは私一人ではあるまい。時代に取りのこされないように私共は新しい決意と努力を更に傾ける必要がある。